この板木を吊して置いた太い松の木が、観音橋の下流北側の土提(現在の地名関裏四二番地)にあった。

ここは、志茂村のほぼ中心であって、この松の木を、村の人は通称「板木松」と呼んでいた。その後、板木は火の見櫓などに吊して置くようになったので、いつしか枯れて、今はその跡形もない。

神事は百姓に取って楽しい休みの日であった。これを報せたり、違反者を取締るのは村の若組だった。

若組は村の長男で、十五歳より三十歳までの若者で結成されていた。神事に違反して仕事をすれば、酒五升、にしん三把を出さなくてはならない規則であった。若組も、娯楽機関の少ない時代だったので、神事にはよく相撲を取って、楽しんでいた。

(話者　井跡忠兵衛)

甘わらび

《小中》

昔、春先のある日の昼頃、この村に一人の旅僧が通りかかった。遠く旅して来たと見え、くたびれた様子で、一軒の農家の軒先に立ちより、『旅の者ですが今朝より何も食べてないので、一椀の飯を振舞って下さらんか』と頼んだ。

家の中から老婆が出て来て、『それは、ずいぶん腹へったんべなあ、ひや飯で良かったら喰っていがんしょ』といって飯の用意をした。

しかし、山村の事でお菜は何もなかった。考えて見ると、今朝、山狩り(山菜取)に行って取って来たやじっか(やせた)の細いわらびを思い出した。それをおつけ(お汁)に入れて煮た。